

2026 年 9 月 8 日

【XCR スプリントカップシリーズ 第 6 戦 / 北海道帯広市】
GEOLANDAR 装着の CUSCO Racing 勢が 1-2 フィニッシュ、番場彬選手が 5 年連続王座を確定！



全 7 戦で競われる 2026 年の「XCR スプリントカップシリーズ」は、シーズンの天王山ともいえる第 6 戦の「RALLY HOKKAIDO」を迎えた。今季唯一となる全日本ラリー選手権との併催大会は、9 月 5 日(土)・6 日(日)の二日間で 14 本の SS(スペシャルステージ)、合計距離 115.76km を走行するスケールの大きな一戦。4 日(金)に北海道十勝地方の中心都市である帯広市の駅前通りで催されたラリーショーとセレモニアルスタートでは、大勢の市民も声援を送って華やかに大会は幕を開けた。

競技本番となった土日は雨に祟られなかったが、レッキ(下見走行)が行われた 3 日(木)の十勝地方は雨模様のうえに一時的な豪雨もあり、競技の舞台となる十勝地方の北部では足寄町で 22 時からの 1 時間に 19.5mm の降水量を記録。この雨はグラベル(未舗装路)の SS を濡らし、競技初日の土曜日は影響が大きく残る展開となった。

XC-2 クラスに参戦する GEOLANDAR 勢では、番場彬選手は、宮本大輝選手と第 3 戦・秋田以来 2 回目のペアを組んで出場。マシンは最新型のトヨタ・ハイラックスを今回から投入、そのポテンシャルにも注目が集まる。また、第 3 戦から三菱・トライトンで参戦する柳澤宏至選手は、コ・ドライバーの加勢直毅選手と安定のベテランペアで挑む。

5 年連続のチャンピオン獲得に王手をかけて臨む番場選手らを待ち受けていたのは、マッディで非常に滑りやすい SS1「PAWSE KAMUY SHORT 1 (9.47km)」。ハイスピードなステージだが雨の影響も大きく残る中、番場選手はライバル有利とも見られていたオープニングステージで 1.8 秒リードするステージベストタイムを刻み、幸先よい出だしとなった。しかし大会最長となる 23.49km の「YAM WAKKA」、その 1 回目となる SS3 の後半からブレーキをいたわる走りを強いられたこともあって、ライバルに 11.3 秒の後塵を拝してトップを譲り、SS3 を終えて 9.5 秒差を追う立場となる。

SS1 のリピートとなる SS4、SS2 のリピートとなる SS5 をともに制した番場選手、その差を 3.5 秒に詰めて迎えた SS6。大会最長ステージの 2 回目、SS6「YAM WAKKA 2」を前にサービスでブレーキパッドの新品を装着するなど可能な対策を講じるも、根本的なトラブルシューティングには至らない難しい状況だった。1 回目よりも路面の水が掃けた箇所が多くなっていた「YAM WAKKA」、番場選手はブレーキに過度な負担をかけないように左足ブレーキの使い方を変えるなどしたドライビングの対応でライバルを下し、セカンドベストタ

タイムでトップを奪還して 6.4 秒差をつけた。さらにこの SS6 では柳澤選手組が本大会の初ステージベストを獲得、2 番手のライバルを射程圏内に捉えていく。



XC-2 クラス 優勝した番場・宮本組（トヨタ・ハイラックス）



準優勝した柳澤・加勢組（三菱・トライトン）

初日終盤の SS7 と SS8 はライバルと番場選手組がステージベストを分け合う結果となり、Leg1 を終えて番場選手組がトップ、6.0 秒差をつけて大会は折り返した。

Leg1 の 89.28km を走り終えて 6.0 秒という僅差の接戦、6 日(日)の Leg2 は残る 26.48km で勝敗を決する。青空も広がっていたが、SS は木々に覆われて日が当たらないところに濡れている箇所が残し、一方で空が見える開けた場所はどんどん乾いていくことから、多様な路面が混在する難しいコンディション。アクセルを踏めるところでしっかりタイムを稼ぎつつ、濡れて滑りやすいところをおさえしていくという、メリハリのあるドライビングと路面コンディションの見極めが求められる。

Leg2 オープニングの SS9 は 0.50km のショートステージ「IKEDA 1」、ここをサードベストであがった番場選手組は 2.9 秒差のトップを守り SS10「TOKACHIGAWA 1 (6.62km)」に臨む。「RALLY HOKKAIDO」では初めて設けられた SS だが、ここで出走順が影響する展開に。番場選手の Leg2 スタート順は、国際部門の 2 台に続く 3 番目だったが、先に走る国際部門の参戦車両が異なるラインで走行するため、ひとつの目安となり得る先行車の走行跡が参考にならないのだ。このため番場選手組は、路面のグリップレベルを探りながら自らの走行ラインを見いだしていくことが求められた。対するライバルは番場選手の次に走行するため、番場選手が走った走行跡も参考にして攻めることが出来る。この差もあってやや不利だった番場選手組はサードベストに留まり、ベストを刻んだライバルの逆転を許し 1.4 秒差の 2 番手にドロップ。

再び追う立場になった番場選手組だが、続く SS11「OTOFUKE REVERSE 1 (6.12km)」で本大会 5 回目のステージベストを刻んで再逆転、SS12「IKEDA 2」は 1 回目の借りを返すかたちでベストを奪い、3.0 秒差をつけたトップで残す SS は 2 本、合計距離は 12.74km。

逃げきを期する番場選手組と追うライバルの熾烈な戦い、SS13「TOKACHIGAWA 2」で番場選手はリヤタイヤが道からこぼれる場面もあったほどに攻めの走りを披露。1 回目よりも 7 秒以上のタイムアップ、フィニッシュした番場選手はミラーで後続のライバルが来るのを待つも、その姿が見えてくることは無かった。

ライバルは SS13 でリタイア、対する番場選手はしっかりフィニッシュまでマシンを運んで、新型ハイラックスのデビューウインを達成。さらに最終戦を待つことなく番場選手がドライバー部門のシリーズチャンピオンを確定、これで前身の「XCR スプリントカップ北海道」発足から数えて、5 年連続負け無しのチャンピオン獲得となった。

また、CUSCO Racing では柳澤選手組が終盤の 2 本でもステージベストを刻み、準優勝を獲得して GEOLANDAR 勢がワン・ツー・フィニッシュを達成。柳澤選手組は 3 位と 7 分あまりの大差をつけ、CUSCO Racing/GEOLANDAR が圧勝を飾る結果となった。

なお、併催の全日本ラリー選手権では、ADVAN 勢が各クラスで好走を見せた。

JN-4 クラスでは山本悠太選手／竹原静香選手(トヨタ・GR86)が今季 3 勝目、加納武彦選手／萱原直子選手(スバル・BRZ)が準優勝でワン・ツー・フィニッシュ。JN-3 クラスでは内藤学武選手／大高徹也選手(トヨタ・GR ヤリス)が開幕戦の三河湾以来となる準優勝、そして JN-1 クラスでも奴田原文雄選手／東駿吾選手(トヨタ・GR ヤリス Rally2)が前戦のカムイに続いての 3 位表彰台を獲得した。



JN-4 クラス 優勝の山本・竹原組 (トヨタ・GR86)



JN-4 クラス 準優勝の加納・萱原組 (スバル・BRZ)



JN-3 クラス 準優勝の内藤・大高組 (トヨタ・GR・ヤリス)



JN-1 クラス 3 位の奴田原・東組 (トヨタ・GR・ヤリス Rally2)

■ 番場 彬 選手 (CUSCO YH ジオランダー・ハイラックス)

今回からマシンは新型のハイラックスとなりましたが、前戦までの旧型と比べてボディ剛性が向上して、細かい S 字コーナーのように切り返しが続く場面で機敏さが増えています。さらにパワーステアリングが電動になったのですが、路面からの急なキックバックが無くなってライトレースが楽になりました。

大会はレッキの木曜日が大雨で、過去に経験したことがないほど“ドロドロ、ヌルヌル”の「RALLY HOKKAIDO」になりました。ただ、天候が回復したので日向ではコンディションが回復する箇所もあり、グリップする箇所と 8 月に参戦した AXCR(アジアクロスカントリーラリー)かと思うような滑りやすい箇所が混在する難しい展開でした。

ライバル勢にとっては久しぶりの大きな大会ということもあり、オープニングステージは様子見傾向を強めると予想したので、自分たちはそこでマージンを稼ごうとプッシュして行きました。ただ正直に言えば新車ということで未知数なところもあったのですが、剛性アップの効果もあってコーナーリングスピードが増したようで、自分自身が「このコーナー、このスピードで曲がれなかったよな」と思うほどでした。結果的にオープニングステージを勝てましたが、これは後々振り返ってみると大きな結果であり、その後の流れを作る要因にもなりました。

接戦の末に初日をトップで終えられましたが、最初から二日目はトップでスタートしたいと思っていました。ライバルに「逃げきる」という立場ではなく、「追いつき、追い越す」という立場で二日目を迎えてもらったほうが、自分たちには絶対に有利だと思うので、初日に頑張ってトップで折り返したのは戦略通りという感じです。

二日目の「IKEDA」は苦手意識が強かったのですが、2 回目で上手く走れてステージベストを獲れたことでライバルを精神的に追い込むことができたであろうことも大きかったですね。ライバルがストップした以降は、チームからも「絶対にワン・ツーで帰って来い」という強いオーダーも出ましたから(笑)、しっかり最後までマシンを運ぶことに集中しました。

新型ハイラックスのデビューウィン、当たり前ですがデビューウィンのチャンスは一回しかないので、これを掴めた上に 5 年連続のチャンピオンも決められてとても嬉しいです。とてもタフな戦いでしたが全てが味方してくれた、そんな印象も残った一戦でした。